

令和6年度「生活者としての外国人」のための特定のニーズに対応した日本語教育事業
【地域日本語教育実践プログラム】

実施内容報告書

団体名： 社会福祉法人せんねん村

1. 事業の概要

事業名称	日常生活に躓きのある(グレーゾーン)16～18歳の若者のための日本語プログラム 若者(16～18歳)×特別支援×日本語教育
日本語教育活動に関する特定のニーズの実情や課題	家族と長く日本で暮らす人にとって、子どもの教育は優先事項であるが、母語・母文化の継承と日本語の学習、異文化への適応の課題など、子どもや家庭にかかる負担は大きい。なかでも、学習や生活に躓きがあるが、母国では支援を受けていなかったり、軽度であるために見過ごされてきたというケースに出会うことがある。具体的には、日時の感覚が弱い、道順が覚えられない、忘れ物が多い、簡単な買い物のおつりが予想できない、文字が覚えられない、状況・善悪の判断が弱い、などであるが、外国ルーツであるために日本語が不得意なのだろうと思われてきたようである。彼らの家族にとっては、子どもが日常生活に躓いていることにうすうす気づいているものの、兄弟姉妹で助け合うことで特に大きな問題になってこなかったために、支援を受けるという考えには至っていない様子である。そして、中学卒業後、進学をためらったり、諦めたり、進学した学校でも進級できずに退学するということが起きている。18歳未満で学籍がなく、日本語での会話や理解が十分でないために職を得ることは大変難しく、年齢が高くなっているゆえに期待される家庭内での家事分担など、一定の役割をこなすことができずに、家族との関係性が悪くなるケースがある。 特定の課題は、日常生活の場面で躓きがあるために、18歳の成人に達していないが学籍や所属がない、あるいは学ぶための支援を受けられていない。さらに、彼らが行政窓口で相談しても彼らを受け入れる機関が見つからない、という点である。
事業の目的	中卒年齢以上のグレーゾーンの若者を対象とし、社会・家庭の一員として自立的な一日を過ごせるようになるために、特別支援教育の視点を組み込んだ効果的な日本語学習プログラムを開発すること。
事業内容の概要 (課題をどのように解決したのか、どのような点が先進的な取組であったのか分かるように記載)	1. 運営委員会の開催 特別支援教育、多文化ソーシャルワーク、障害者就労相談、日本語教育の各分野の専門家に参集いただき、学習者を把握するためのアセスメントについて多くの具体的アドバイスをいただいた。 2. 日本語教育の実施 ① 学習者の生育環境把握(生育歴、宗教、家族構成)。学習者が継続的に通室できないような場合、家庭への支援が必要だと判断し、専門機関へつなぎ社会的な居場所確保に努めた。 ② 日本語教育の内容

	学習者の発達にでこぼこがあることを前提とし、規則正しい生活と繰り返しの活動による安心感をもたせつつ、体験重視の活動を通して必要性の高い語彙や表現を習得できるシチュエーションを作っていた。また、重要としている視点としては、日本語を学ぶということにとどまらず、学んだことを他者のために生かし、認められるという循環の中で自己有用感を高めていけるように工夫したという点である。 3. 報告会の実施 対面とオンラインのハイブリッドで開催した。 タイトルにも記載した、若者（16～18歳）×特別支援×日本語教育というキーワードに関心を寄せる方たち、総勢30名程度が参加してくださった。障害者就労相談事業運営者、小中学校教諭、定時制高校教諭、特別支援学校教諭、学生支援機関、NPO、地域の日本語教室関係者などが集った。
事業の実施期間	令和 6 年 5 月 ～ 令和 7 年 3 月 （ 11 か月間）

2. 事業の実施体制

（1）運営等委員会

実施体制	構成員の人数：4名の専門家と、事務局として当方から3名、計7名 構成員の主な属性や専門性：特別支援教育、多文化ソーシャルワーク、障害者就労相談、日本語教育 運営方法： 事務局は3名（司会進行、機材管理・記録係、クラス担当者） 開催方法は、対面とオンライン zoom ※対面の叶わない委員はオンライン参加 ※機材、資料は当方からすべて持込 ※会議資料は、各会の1週間程度前に共有し、当日の発言をご用意いただいた。
------	---

（2）地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制	図解した通り、学習者である若者に必要な事業所や機関と協力をしながら、せんねん村が実施をしていく。
------	---

(3) 中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制

実施体制	コーディネーター：川上貴美恵/担当：すべての取組。 指導員：大橋歩美/担当：クラスでの日本語指導、教材作成、行事にて生徒引率 助言者：菊池寛子/担当：アセスメントで使用するDLA情報提供とアドバイス 助言者：濱田照男/担当：発達課題のある若者へ理解とアセスメント、教材や指導法についてのアドバイス 会計：KIBOU内の現金出納管理は伊藤ゆかり、法人本部における収支管理は加藤大佳
------	--

3. 各取組の報告

運営等委員会の設置 【名称：日常生活に躓きのある（グレーゾーンの）16～18歳の若者のための日本語プログラム運営委員会】			
取組の目標	課題を明らかにし、プログラムの目標を達成するために必要な事柄について検討する。		
内容	4名の専門家：特別支援教育、多文化ソーシャルワーク、障害者就労相談、日本語教育に出席いただき、討議を重ねた。 第1回 委員の紹介、事業概要説明と質疑、今度の予定 第2回 前回の委員会からの修正箇所確認、追加資料提示、実施の承認 第3回 生徒の実態報告、課題、方策提案 第4回 進捗報告と質疑、総括		
本取組により検討された事業の方針や特定のニーズに対応した日本語教育の方向性	① 申込面談時に、個表の記入や生活チェック、DLA（語彙、話す）を実施し、早い段階で学習者の個性を把握すること。 ② 1年という短い期間での実施であるので、学習者を就労・就学へとつなげていくための意識づけや参加体験を重視するということ。		
実施期間	令和 6年6月8日から 令和 7年2月22日 まで	開催時間・回数	1回 2時間 × 4回 = 8時間

特定のニーズに応じた日本語教育の実施 【名称： のぞみクラス 】	
取組の目標	グレーゾーンの若者が、約束や時間を守りながら自立的な一日を過ごせるようになること。 “できた！うれしい！”を体験し自己有用感を高めること。 就労・就学を意識し、目指せるようになること。
内容	学習者であるグレーゾーンの若者にとってのテーマは、日本語を学ぶ過程で「自己有用性を高める」「就労・就学を意識し目指せるようになる」であるので、異年齢や他者との交流、行事参加、役割を果たすなど、体験重視の内容とした。 【一日の流れ】 午前9時半～11時 通室、学習準備、一斉活動へ参加（異年齢と交流） 午前11時～12時 日本語学習（日記/多読/ときに読み聞かせ） 12時～午後1時 昼休憩（食事指導を含む） 午後1時～2時 工作・製作 午後2時～3時 日本語学習 （生活上の躰みやトラブルに沿った内容、あるいは行事準備） 午後3時 終了、帰宅 ※自宅学習の習慣をつけるために、宿題を持ち帰る。
取組による特定のニーズに対する工夫	1. 学習者が学びの場へ継続的に通うことができるようになるまでの生活面を支えるために、家庭訪問や保護者との面談を重ねた。 2. 学習者の発達的特徴をいち早く把握するために、生活チェックを実施した。 3. 学習者の環境を把握し、困難な中でもその強みを見出すためにエコマップを採用した。 4. 日本語と母語・あるいは第一言語での対話型アセスメント（DLA（話す））を実施した。 5. 得られた情報をまとめるため、個別の指導計画を作成した。 6. 行事やイベントへ積極的に参加し、その準備や係を通して日本語学習をすすめた。

個別指導計画 (概)

学習者名: 山崎 太郎 (Yamazaki Taro)

指導者名: 山崎 太郎 (Yamazaki Taro)

指導期間: 2023.01.01 ~ 2023.03.31

指導内容: 日本語学習、生活指導、職業指導、社会参加

指導目標: 学習者の生活面を支えるために、家庭訪問や保護者との面談を重ねる。学習者の発達的特徴をいち早く把握するために、生活チェックを実施する。学習者の環境を把握し、困難な中でもその強みを見出すためにエコマップを採用する。日本語と母語・あるいは第一言語での対話型アセスメント（DLA（話す））を実施する。得られた情報をまとめるため、個別の指導計画を作成する。行事やイベントへ積極的に参加し、その準備や係を通して日本語学習をすすめる。

指導計画表 (概)

指導日	指導内容	指導時間	指導場所	指導者
2023.01.01	通室、学習準備、一斉活動へ参加	9:30-11:00	学習室	山崎 太郎
2023.01.02	日本語学習 (日記/多読/ときに読み聞かせ)	11:00-12:00	学習室	山崎 太郎
2023.01.03	昼休憩 (食事指導を含む)	12:00-13:00	食堂	山崎 太郎
2023.01.04	工作・製作	13:00-14:00	工作室	山崎 太郎
2023.01.05	日本語学習	14:00-15:00	学習室	山崎 太郎
2023.01.06	生活上の躰みやトラブルに沿った内容、あるいは行事準備	15:00-16:00	学習室	山崎 太郎
2023.01.07	終了、帰宅	16:00-17:00	学習室	山崎 太郎

指導計画表 (詳細)

指導日	指導内容	指導時間	指導場所	指導者
2023.01.01	通室、学習準備、一斉活動へ参加	9:30-11:00	学習室	山崎 太郎
2023.01.02	日本語学習 (日記/多読/ときに読み聞かせ)	11:00-12:00	学習室	山崎 太郎
2023.01.03	昼休憩 (食事指導を含む)	12:00-13:00	食堂	山崎 太郎
2023.01.04	工作・製作	13:00-14:00	工作室	山崎 太郎
2023.01.05	日本語学習	14:00-15:00	学習室	山崎 太郎
2023.01.06	生活上の躰みやトラブルに沿った内容、あるいは行事準備	15:00-16:00	学習室	山崎 太郎
2023.01.07	終了、帰宅	16:00-17:00	学習室	山崎 太郎

指導計画表 (評価)

指導日	指導内容	指導時間	指導場所	指導者
2023.01.01	通室、学習準備、一斉活動へ参加	9:30-11:00	学習室	山崎 太郎
2023.01.02	日本語学習 (日記/多読/ときに読み聞かせ)	11:00-12:00	学習室	山崎 太郎
2023.01.03	昼休憩 (食事指導を含む)	12:00-13:00	食堂	山崎 太郎
2023.01.04	工作・製作	13:00-14:00	工作室	山崎 太郎
2023.01.05	日本語学習	14:00-15:00	学習室	山崎 太郎
2023.01.06	生活上の躰みやトラブルに沿った内容、あるいは行事準備	15:00-16:00	学習室	山崎 太郎
2023.01.07	終了、帰宅	16:00-17:00	学習室	山崎 太郎

指導計画表 (まとめ)

指導日	指導内容	指導時間	指導場所	指導者
2023.01.01	通室、学習準備、一斉活動へ参加	9:30-11:00	学習室	山崎 太郎
2023.01.02	日本語学習 (日記/多読/ときに読み聞かせ)	11:00-12:00	学習室	山崎 太郎
2023.01.03	昼休憩 (食事指導を含む)	12:00-13:00	食堂	山崎 太郎
2023.01.04	工作・製作	13:00-14:00	工作室	山崎 太郎
2023.01.05	日本語学習	14:00-15:00	学習室	山崎 太郎
2023.01.06	生活上の躰みやトラブルに沿った内容、あるいは行事準備	15:00-16:00	学習室	山崎 太郎
2023.01.07	終了、帰宅	16:00-17:00	学習室	山崎 太郎

実施期間	令和 6年5月23日 から 令和 7年3月13日 まで	授業時間 ・コマ数	1回 4.5 時間 ×117 回 = 526.5 時間							
対象者	グレーゾーンの若者 (16～18 歳)	参加者	総数のべ 261人 (受講者 2 人、指導者・支援者等 2 人)							
日本語教育の言語技能とレベルについて	○理解すること〈聞くこと〉A2目標 例) 1対1の会話でよく使われる日時や持ち物などの語彙、指示、表現を通常のスピードで聞いて概ね理解できる。 〈読むこと〉A2目標 例) おたより、黒板に掲示した指示・内容を指導員の助けをかりながら何度か読み理解する。 ○話すこと 〈やり取り〉A2目標 例) できごとを時系列に話し、5W1Hを伝え、聞かれたことに簡単に答えることができる。 〈発表〉A2目標 例) 列席者の前で、練習をした作文を読むことができ、思い出と簡単な理由を述べるができる。 ○書くこと 〈書くこと〉A2目標 例) 感想や考えを書きやすいフォームにそって、知っている語彙や表現を使って短い文を書くことができる。指導員の手伝いがあれば、簡単な理由なども続けて書ける。									
日本語教育の対象とする生活上の行為について	○ 場面にあった挨拶の仕方・・・大分類Ⅷ、中分類14、小分類(31) ○ ゴミの分別・・・大分類Ⅷ、中分類15、小分類(34) ○ 電話をかける/出る・・・大分類Ⅹ、中分類21、小分類(47) ○ 買い物・・・大分類Ⅸ、中分類19、小分類(41) ○ 申込/申請する・・・大分類Ⅸ、中分類19、小分類(39) ○ 健康を保つ・・・大分類Ⅰ、中分類01、小分類(03) ○ 栄養バランスに気をつけた食事・・・大分類Ⅰ、中分類01、小分類(03) ○ 季節や天候にあった服装など・・・大分類Ⅰ、中分類01、小分類(03) ○ バスや電車での移動・・・大分類Ⅳ、中分類07、小分類(10) ○ 交通規則(徒歩、自転車)・・・大分類Ⅳ、中分類08、小分類(12)、(13) ○ 困ったときに尋ねる/助けを求める・・・大分類Ⅳ、中分類07、小分類(10) ○ 季節の行事を知る(日本/母国)・・・大分類Ⅶ、中分類14、小分類(32) ○ SNSの使い方・・・大分類Ⅹ、中分類21、小分類(46) ○ お金の管理・・・大分類Ⅲ、中分類06、小分類(09)									
使用した教材・リソース	就労移行支援のためのチェックシート https://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/08/dl/h0823-1a.pdf 外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm									
受講者の出身（ルーツ）・国別内訳（人）	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	0	0	1人	0	0	0	0	0	0	0
	エクアドル（1人）									

取組事例①

体験したことについて簡単な感想が書けること、気持ちや意見を言えることを当該生徒の目標とし、授業実施日には毎日必ず日記を書く時間を設けた。感想や考えを表現することがあまりないため、それを引き出すためのフォームを何度か修正をしながら準備し使用した。

一日の出来事や生徒の気持ちを、指導員と一緒に言語化。何度も繰り返し音読や発話の練習をし、日本語で伝える練習をした。繰り返すことで表現が定着し、語彙が増えた。特に、「～たい」「～てほしい」という表現を使って、身近な大人へ頼むことができるようになったときは感激した。また、出来上がった日記は生徒がPCで入力して記録。その過程で、ローマ字を覚え一人で入力できるようになった。また、入力した文字を漢字変換し正しいものを選ぶなかで、自然と使用頻度の高い漢字を覚え、正しい変換ができるようになったものもあった。日記作成は、指導員にとっても対象生徒らの生活状況を把握することができる重要なものであった。

何

なまえ _____

月	日	(	よ	天気

◎おもちゃを あらわず こぼれを かならず つかいましよう。たとえば・・・

うれしかった	かなしかった	がんばった
たのしかった	くやしかった	できなかった
がんばりたい	やってみたい	いいなおもつた
おもしろかった	さみしかった	

いつ? _____
どこ? _____

なにをした? なにがあった? どんなきもちだった?

☐ なに

☐ どう

◎あしたのことを かんがえてみましょう。たとえば・・・

[○○○ をする]	[○○○ がしたい]
そうじ をする	おてつだい をする
かいもの に いきたい	かぞく と でかける
べんきょう をする	おかし を たべる
うみに いく	

あしたは、なにをする? あなたの、したいことは?

名前(なまえ): [redacted]
 いっつ: [redacted]
 どこ: セル
 おわかりました。まっさーじしました。しゃわーはりました。
 教会行きました。帰りました。
 ★明日(あした)は、なにをします? →おてつだい いく
 ★やすみのひ、たのしかったことは なにですか? →土曜日 教会 歌

名前(なまえ): [redacted]
 いっつ: [redacted]
 どこ: いえ
 おきました。そうじしました。かいものしました。ねました。つかれた。
 ★明日(あした)は、なにをします? →kibou いく セルいく
 ★やすみのひの、おもいで は?
 →教会いきました。楽しかった。サンドイッチ食べました。

名前(なまえ): [redacted]
 いっつ: [redacted]
 どこ: kibou
 おはなしました。とうきょうのひとたちとしゃべりました。たのしかった。
 おわかりました。セル行きました。かえりました。
 ★明日(あした)は、なにをします? →きぼうにいけますセルいく

名前(なまえ): [redacted]
 いっつ: [redacted]
 どこ: きばう
 おわかりました。いきました。いきました。ともだちのいえにいきました。
 たのしかった。かえりました。ねました。

名前(なまえ): [redacted]
 いっつ: [redacted]
 どこ: いえ
 起きました。掃除をしました。買い物しました。
 マクドナルド 行きました。疲れた。
 ★明日(あした)は、なにをします? →教会行きます、お手伝い いきます、
 ★11月、たのしみに している ことは なに? →誕生日

取組事例②

【令和6年5月23日～令和7年3月13日】お金の計算・使い方の学習

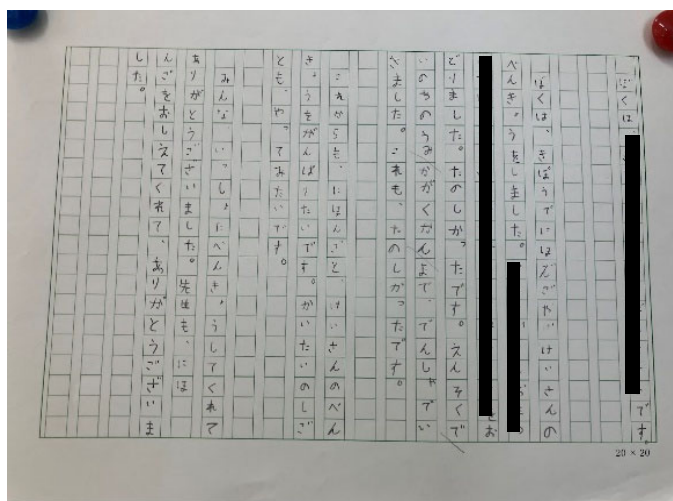
生活にかかわる計算に慣れ、日常的に考えながらお金を使うという感覚を養うことを当該生徒のためとして、お金の計算練習を継続して行った。教具のお金や、実際に生徒が買い物をした際に受け取ったレシートや、自作の計算プリントなどを活用した。当初は、硬貨の枚数だけを単純に数えて“円”をつけて答えていたが、1円玉が5枚で5円玉1枚になる、5円玉が2枚で10円玉1枚になるという規則を理解し数えることができるようになった後は、実際の買い物場面を想定した会話練習、貯金の概念や目的をもったお金の使い方など、金銭管理の学習に繋がった。学習を継続していく中で、生徒から「(明日お金を使うから) 今日はお金をつかわない。」という見通しをもった発言が聞かれるようになった。



取組事例③

【令和7年3月13日】修了式

年度の終わりには、一年が終わったという意識を持つために修了式へ出席した。修了式前は、一年を通して当該生徒のがんばったことや参加行事などの楽しかった思い出などを振り返るという時間を設けた。修了式参加生徒は、作文を参列者の前で音読することが恒例となっており、当該生徒は他クラスの生徒の活動を見て、皆の前で作文発表をしたいという気持ちを指導員へ伝えることができた。そして、ほとんど指導員の助けを借りずに自分の気持ちを書いて、「ありがとう」を散りばめた作文を書き、毎日のように音読練習をした。式当日は、服装や時間を守って参加し、他クラス生徒や保護者など40名近くの前で発表。日々の日本語の音読練習の成果がみられ、発音の難しい語彙も詰まらずに、良い声の調子で最後まで読み上げることができた。また、関わったKIBOU職員に自ら日本語で手紙を書きたいと申し出、内容やイラストも一人一人すべて変え、封筒へ入れて手渡し、気持ちを伝える姿も見られた。



(2) 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

約束や時間を守りながら自立的な一日を過ごせるようになること、という目標はある一定程度達成できた。しかし、約束をしていても、日常生活の中で優先順位がかわってしまい、約束が守れないということはまだまだある。

自己有用感を高める、という点についてもある一定程度達成できた。当初は「わからない。なんでもいい。できない。」という発言の多かった生徒が自ら「参加したい」と申し出たり、指導員の手助けを借りなくとも、知っている単語や表現を駆使して作文を書き上げるなどの様子の変化がみられた。「できる。やってみたい。」という気持ちが高まったことがうかがえる。

就労・就学を意識し目指せるようになること、という点については、まだあまり理解が深まっていない様子である。就学を目指し、学校教諭との面談の予約をしたが家庭の事情で叶わず、生徒と指導員だけで見学へいかせていただいた。当該生徒は大変気に入って就学したいと言ったがそれも叶わず、冬になるころには、就学を断念し、就労を目指すことになった。就労については、「お金があると好きなものを買える」という理解でとどまっており、どんな仕事でどれくらいの給料をもらうのか、食事や電車代にどのくらいのお金がかかるのかという具体的なイメージは、まだ持っていない様子。就労相談へとつなぎ、事業所を訪問して就労体験をさせてもらえるように手配した。

(3) 今後の改善点について

1. 生徒募集がすすまず、定員4名に達しなかった点
2. 不安定な生活環境であっても生徒が学べるように、フォーマル、インフォーマル問わずに活用できる支援を模索する点。

取組の成果の発信	
【名称：①ブログ ②報告会 】	
取組の目標	① 取組のキーワードである「日本語教育×特別支援×若者(16～18歳)」でつながることのできる日本語指導者へと情報を発信する。 ② 今年度の終わりには報告会を実施し、遠方からでも参加できるようにオンラインと対面とのハイブリッド開催をする。
内容	① ブログでの情報発信 同じ課題意識をもつ教育関係者へ向けて情報発信をした。また、家庭にも情報が届くように、学習者や家庭の第一言語での発信をした。 ② 報告会(対面とオンライン) 地域の現状と課題、プログラムの必要性、内容、効果、展望を報告する。運営委員として出席の専門家には、総括いただいた。
取組による特定のニーズに対する工夫	学習者の姿、活動の様子を多言語で発信し、同じ課題をかかえる保護者や他地域の支援者に伝えていった。また、報告会の参加者には、後日アンケートへおこたえいただき、質問や意見は参加者や運営委員と共有した。

実施期間	令和 6 年 6 月 1 日 から 令和 7 年 3 月 15 日 まで	時間数	① 0.5 時間/記事×12 回×6 言語＝36 時間 ② 1.5 時間×1 回＝ 1.5 時間
対象者	「日本語教育×特別支援×若者(16～18歳)」でつながることのできる関係者	参加者	① 閲覧者 5737 人(2024 年) ② 総数 30 人

(1) 特徴的な活動風景 (2～3 回分)

取組事例①

その 1. 【令和 6 月 11 月 17 日】アクティにしおまつり

<https://tabunkakibou.wordpress.com/2024/11/20/festival-de-acty-2024/>

その 2. 【令和 6 年 3 月 13 日】修了式

<https://tabunkakibou.wordpress.com/2025/03/13/shuryo-shiki/>

その 1. アクティにしおまつりの記事 (日本語とスペイン語)

アクティまつり 2024

11月17日 (日) アクティまつりが ありました。

KIBOUは、ブースを出しました。じゃんけんをしたお客さんは、ちいさいお菓子のプレゼントをうけとりました。

FESTIVAL DE ACTY 2024

El domingo, 17 de Noviembre se llevó a cabo el festival de Acty.

Nosotros, KIBOU fuimos un puesto en el festival. Las personas que jugaron a piedra, papel o tijera con nosotros recibieron un pequeño obsequio de caramelos.

その 2. 修了式の記事 (日本語とポルトガル語)

1人ずつ、メッセージと修了書(しゅうりょうしょ)をもらって感動(かんどう)しましたね。さくぶんを読むとき、ドキドキしましたね。「未来へ」という歌を 歌いましたね。とても深い

CERIMÔNIA DE ENCERRAMENTO DO KIBOU 2024

Dia 13 de março de 2025, realizamos a Cerimônia de encerramento das turmas da parte da manhã.

As turmas dos jovens, a turma de crianças em fase escolar e seus pais participaram vestindo roupas sociais.

A maioria das crianças tiveram sua primeira cerimônia no Japão.

取組事例②

【報告会 令和7年3月15日】午後1時～2時半

開催場所: 多文化ルーム KIBOU

開催方法: 対面とオンライン

オンラインでの参加者 23 名であったが、北海道から長崎まで広く関心を持つ方がおられた。

報告内容は、スライドを使って地域の現状と課題、プログラムの必要性、内容、効果、展望を報告した。

運営委員として出席の専門家には、総括いただいた。また、開催後には簡単なアンケートを実施し、報告をしたプログラムが他地域で使用可能かの検証に参加できるかどうかをたずねた。

令和6年度 文部科学省「生活者としての外国人」のための特定のニーズに対応した日本語教育事業

日常生活に顕著のある(グレーゾーン)16～18歳の若者のための日本語プログラム
日本語教育×特別支援教育×若者

報告会のご案内

私たちが出会ってきた、日本語を学び高校進学を目指す多様な若者たち。彼らのなかには、“がんばっているのに、覚えられない。忘れ物が多い。時間が守れない。お金をうまく使えない。状況判断が苦手。”など、グレーゾーンと呼ばれる状態あり、生活に顕著な学習困難が生じています。彼らが、将来夢の日本職人に夢を、自己有用感を高めながら自立した一日を過ごせるようこの願いを込めて、プログラム開発に挑戦しました。肝余曲折と工夫の日々をご報告します。皆様のお申し込みをお待ちしております。

名 称 : 日常生活に顕著のある(グレーゾーン) 16～18歳の若者のための日本語プログラム報告会
と き : 令和7年3月15日(土) 午後1時～2時半
開催方法: 対面とオンラインzoom
場 所 : 多文化ルームKIBOU (愛知県西尾市鶴ヶ崎町6-2、アクリルにお3階)
定 員 : 対面15名、オンライン20名
対 象 : 外国ルーツ生徒の学習に関わる方、関心をお持ちの方
締 切 : 3月7日(金)
問合せ : 0563-77-7457 担当: 川上
申 込 : Googleフォームでお申し込み→



(2) 目標の達成状況・成果(取組による特定のニーズの充足)

取組のキーワードである「日本語教育×特別支援×若者(16～18歳)」でつながることのできる日本語指導者へと情報を発信する、という点については達成できたとは言い難い。発信の内容を、誰に対して届けたいかという点に絞って検討していく必要がある。

次に、報告会を実施し遠方からでも参加できるようにオンラインと対面とのハイブリッド開催をする、という点については概ね達成できた。上記したように、北海道など遠方からも参加者があったことを考えると、成果があったといえる。

(3) 今後の改善点について

今回の報告会参加者の属性を見てみると、小中学校、特別支援学校、学生支援団体、就労相談事業所、日本語専門学校、大学、NPO など、日本語教育という枠を超えて他業種の方からも申し込みがあった。当初は、「日本語教育×特別支援×若者(16～18歳)」のキーワードでつながることのできる日本語指導者を対象に発信をしていくという考えでいたが、このキーワードでつながることのできる関係者はもっと多いのだと気づいた。“汎用”という点で、見直したい。

4. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

中卒年齢以上のグレーゾーンの若者を対象とし、社会・家庭の一員として自立的な一日を過ごせるようになるために、特別支援教育の視点を組み込んだ効果的な日本語学習プログラムを開発すること。

(2) 特定のニーズの充足に向けて試行した方法

特定のニーズは、グレーゾーンの若者に対する日本語教育である。

学習者であるグレーゾーンの若者を取り巻く環境は複雑で、本人の力だけでは乗り越えられないような状況があり、また中卒以上で進学・就労をしておらずモチベーションの低い状態から出発する学習者を対象とする本事業においては、ニーズの充足にむけてまず生活を整えるという地点から始める必要があった。下に記すものは、グレーゾーンであるがゆえの二次的な生活面での障害ともいえる。

《学習以前の生活課題》

- 学習に対してマイナスのイメージがある
- 全体的に自信がないので、何もしたくない
- 家庭内の人間関係がよくない/信頼関係が薄い
- 居場所がない/行き場がない
- 生活困窮
- 生活環境適応のストレス

以上のような生活課題を乗り越えたり解決したりして、学習の場へ継続的に通うことで初めて就労・就学について具体的なイメージをもって目指せる。そのために、試みたことは次の3つの取り組みである。

1. 運営委員会

多文化ソーシャルワーク有識者、特別支援教育有識者、就労相談管理者、日本語教育アドバイザーからなる各分野の専門家による運営委員会を開催。プログラム全体の方向性、生徒への理解、就労相談について、アセスメント等アドバイスをいただいた。

生徒受入れに際し、若者の環境やレベルを把握し、継続的な通室に結び付けることを目的として次のようなことを実施、修正しまとめた。

- ① 家庭訪問や保護者との面談を重ねる
- ② 学習者の発達の特徴をいち早く把握するために、生活チェックを実施
- ③ 学習者の環境を把握し、困難な中でもその強みを見出すためにエコマップを採用
- ④ 日本語と母語・あるいは第一言語でのDLA（話す）を実施
- ⑤ 得られた情報をまとめるため、個別の指導計画を作成

2. 日本語教育の実施

学習者であるグレーゾーンの若者にとってのテーマは、「日本語を学ぶ過程で自己有用性を高めること。就労・就学を意識し目指せるようになること」である。そのために、試みたことは次のとおり。

- ① 一日の流れを可視化し、見通しをもって過ごせるようにした。
- ② 日記は、自らの行動や思いを整理し言語化するために毎回実施
- ③ お金の計算・使い方指導は計画的に使うために毎回実施
- ③ 自己有用感を高めるため、行事や役割を積極的に担い、できることを増やしたり、現場を見に行きイメージを具体化させたり、達成感を味わえるような機会を多く作った。

3. 情報発信・報告会

当方のウェブサイトのブログに、1年を通して計13の記事を掲載。各記事は、日本語を含めて6言語へと翻訳をして、発信をした。

報告会は、3月に実施し、遠方で活動する同じ課題意識をもつ関係者とつながり、発信するために対面とハイブリッドで開催した。

(3) 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

特定のニーズに対応するために、その課題を明らかにし、整理し、方策を提示できた点において成果が得られたと考えている。運営委員からも、1年目のまとめとしては良いという評価をいただいた。

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果等

地域の教育機関、市役所、就労相談、事業所などを訪問見学する機会を多く作り、生徒が足を運ぶことで具体的なイメージを持てるようにしたという点について、とても効果があった。これは、見学へ行った後に、生徒から「〇〇で勉強したい。」「いつお知らせくる？（面談の結果）」「次は、いついく？（就労支援事業所）」などの前向きな発言が多く聞かれ、良いイメージが持てた証だと言える。

(5) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

ウェブサイトへの掲載、地域の関係機関へメールリングリストでの周知をお願いし、反響があった。とくに、教育関係者からは励ましの言葉をいただき、市教委からは報告会へ参加者があった。

(6) 今回のプログラム実施を通して得られた知見やノウハウ

本報告書1. 事業の概要にも記載したが、本プログラムの対象者が学齢を過ぎた年齢の若者であるという点が大きな特徴である。彼らは、身体的には大人サイズであるものの言動にはまだ幼さが残り、アイデンティティの形成に揺らぎ、簡単に他人を信用してしまうなどの警戒心の低さもあわせもつ年代で、交友関係も行動範囲も急に広くなり、保護者が把握できないくらいになっている。それに加えて、日常生活に躓きがあり、学習の場面から遠ざかっている。彼らを把握するということが、ほとんどすべてと言っていいほど重要であることがわかった。また、次に大切なことは、日本語学習・活動を通して学習の場へ復帰でき、自己有用感を高めることができた生徒を良いタイミングで就学・就労へとつなぐということである。そのために、地域でつながることのできる団体や事業所、学校など、頼りにできる関係づくりには時間を割くべきであろうと考える。これらは、文章にはしにくい部分であるが、事業をうまく運営し、生徒や家庭を気持ちよく送り出せる環境作り（下地作り）は欠かせない。

(7) 改善点、今後の課題について

取組全体としての課題、改善点

① 生徒の募集がすすまなかった

→自ら当該クラスへ申込む生徒はいなく、申込時の聞き取りとチェックによって特定ニーズ「のぞみクラス」を案内し、参加してもらった。次年度も、他クラスへの申込者のうち、学齢期を過ぎた若者には生活チェックとDLAを実施するという方向で生徒の確保に努めたい。

② ウェブサイト、ブログでの発信内容について

→実施内容にとどまり、誰に対してどのような情報を届けたいかを整理していく必要がある

③ 同じ課題意識をもつ他団体との交流ができていない

→学習者を取りまく環境に違いがあるのか、学習者を支援できる社会的資源に違いがあるのか、また当方が今年度まとめた個別の指導計画（案）は有効であるのかを検証していきたい。